ヨーロッパにおけるグローバルヘルスの人類学
──MAGic2015 に参加して

国立民族学博物館研究戦略センターでは、人類学の世界的な研究動向の調査を行っている。その一環として、筆者は 2015 年 9 月 9 日から 11 日にかけてイギリスのサセックス大学で行われた MAGic2015 に参加した。本稿では、そこで展開されていた議論の一端を報告したい。

MAGic は、ヨーロッパ社会人類学会医療人類学ネットワーク（EASA Medical Anthropology Network）と英国王立人類学協会医療人類学委員会（RAI Medical Anthropology Committee）の共催で行われている隔年の研究大会で、今回が 3 回目の開催となる。MAGic2015 のテーマは「人類学とグローバルヘルス──理論、政策、実践を問う」であり、文字通り、ヨーロッパにおけるグローバルヘルスの人類学の最新の研究が発表される場となっていた。グローバルヘルスの人類学は、2000 年代後半以降アメリカを中心に盛んになってきたが、ヨーロッパにおいてもグローバルヘルスの人類学に対する注目が高まっている。

その背景として挙げられるのが、2014 年 3 月に発覚し、現在も完全に収束してはいない、西アフリカにおけるエボラウイルス病の流行である。日本ではほとんど話題にのぼらなくなって久しいが、西アフリカの国々と関係の深いヨーロッパにおいては、現在でも重大な関心事であり続けている。特に、今回の流行に際しては、報道や国際機関、NGO の発表などの様々な場面で流行地域の文化について議論されたこともあり、文化の専門家として多くの人類学者がエボラウイルス病への対応に参与してきた。MAGic2015 では、医師やコーディネーターとして現場で活動した者や Ebola Response Anthropology Platform (http://www.ebola-anthropology.net/) を立ち上げた者など、多くの人類学者がそれぞれの経験に基づいた発表を行っていた。2014 年のエボラウイルス病の流行は、実践的・応用的な人類学が大規模に活用されただけでなく、誰もがそれについて考えたことがあり、また、発言すべきことを持っているという意味で、グローバルヘルスの人類学の状況を一変させている。

エボラウイルス病とそれへの対応についてはすでに人類学者による膨大な報告が web ページを中心に発表されているが、MAGic2015 に参加して分かったことは、この経験をどのように整理するのかについては、まだ十分な合意があるわけではないということである。むしろ、エボラウイルス病の流行は人類学者に多くのジレンマを投げかけていると言っていい。

休憩時間には会場の外でも活発な議論が行われた（2015 年 9 月 10 日、サセックス大学）。

例えば、全体会合で発表したサセックス大学のメリッサ・リーチは、エボラウイルス病の流行のような危機に対して人類学者がすぐに対応できる準備をしておくことは重要だと述べる一方で、人道主義的な介入に対する批判性も持ち合わせておく必要があることも強調していた。リーチによると、この矛盾は時間性と関係しており、初期段階においては人類学を人道援助のための道具として動員することが重要であり、時がたち状況が好転するとともに反省的な視点の重要性が高まっていくという。このようなフェイズによって果たすべき役割を変えるべきだという議論は、他の場面に適用可能な有益な視点であるように思われる。

また、エボラウイルス病への対応においては、当該地域のコミュニティの協力をいかに得られるのかが重要だという共通認識がある一方で、コミュニティの役割は両義的だという指摘もなされた。宗教者や首長、若者組織や女性組織が重要な役割を果たしたことが強調される一方で、コミュニティがエボラウイルス病への対応に「抵抗」した事例もあるからだ。同時に、「抵抗」と指摘されている「推奨される埋葬方法の拒否」については、一面的なやり方を権威主義的に押し付けずに、人々との対話を通じてより受け入れやすい方法を考案できたはずだという主張もあった。さらには、そもそも「コミュニティ」なるものについての想定が誤っているという批判も行われた。これらの議論は、必ずしも新しいものではなく、むしろ開発人類学や医療人類学で長い間議論されてきたことではあるが、エボラウイルス病の流行によって改めて人類学者の社会貢献と、それに付随する問題に注目が集まっている。

これから復興に向けての取り組みが本格化する中で、これまでとは異なる問題が発生することが予想され、また、援助組織についての人類学的研究の必要性も提起されている。エボラウイルス病とグローバルヘルスについての人類学は、大きな広がりと奥行きをもって今後も展開していくことが予想される。

文・写真　浜田明範

国立民族学博物館機関研究員。専門は医療人類学、アフリカ地域研究。ガーナ南部のカカオ農村地帯を対象に生権力と統治についての研究を行っている。著書に『薬剤と健康保険の人類学──ガーナ南部における生物医療をめぐって』（風響社 2015 年）、論文に「書き換えの干渉──文脈作成としての政策、適応、ミステリ」『一橋社会科学』7（別冊）（2015 年）など多数。